

十二支考

兔に関する民俗と伝説

南方熊楠

青空文庫

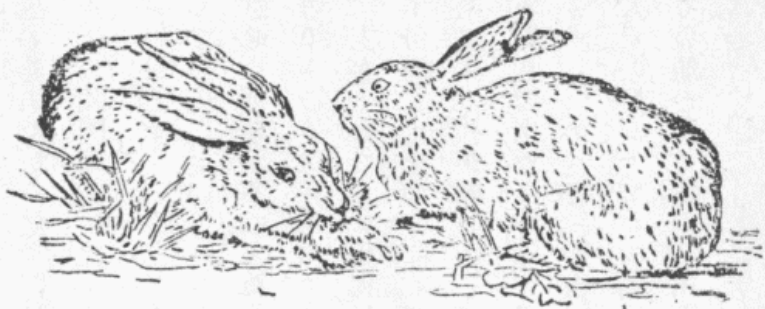
第1図 野兎

第2図 熟兎

第3図 岩兎

この一篇を綴つづるに先だち断わり置くは単に兎と書いたのと熟なんき兎と書いた物との区別である。すなわちここに兎と書くのは英語でヘヤー、独名ハーセ、ラテン名レプス、スペイン名リエプレ、仏名リエヴル等が出た、アラブ名アルネプ、トルコ名タウシヤン、

梵名舎々迦ささか、独人モレンドルフ説に北京辺ペキンで山兔、野兔また野猫
児と呼ぶとあつた。吾輩幼時和歌山で小児を睡ねむらせる唄うたにかちか
ち山の兎は笹ささの葉を食う故耳が長いというたが、まんざら舎々迦ささか
てふ梵語に拠よつて作つたのであるまい。兎を野猫児とはこれを啖
肉獸たる野猫の児分こぶんと見立てたのか。ただしノルウエーの兎は雪
を潜くぐつて鼯はつかねずみ鼠ねずみを追い食う（一八七六年版サウシ『随得コンモンプレー
手録』三）と同例で北京辺の兎も鼠を捉るのか知れぬ。日本
では専ら「うさぎ」また「のうさぎ」で通るが、古歌には露つゆぬす
窃みてふ名で詠よんだのもある由（『本草啓蒙』四七）。また本篇
に熟兎と書くのは英語でラビット、仏語でラピン、独名カニンヘ
ン、伊名コニグリオ、西名コネホ、これらはラテン語のクニクル



スから出たので英国でも以前はコニーと呼んだ。日本では「かい
うさぎ」、また外国から来た故南とうなす瓜を南ナンキン京というごとく南京
兎と称う。兎の一類はすこぶる多種でオーストラリアとマダガス
カルを除き到る処産するが南米には少ない。日本普通の兎は学名
レプス・ブラキウルス、北国高山に棲すんで冬白く化けるやつがレ
プス・ヴァリアピリス、支那北京辺の兎はレプス・トライ、それ
から琉球特産のペンタラグス・フルネツシは耳と後脚がレプス属
の兎より短くて熟兎に近い。一八五三年版パーキンスの『亜ライフ比
西イン・アピシニア尼住記』にもかの地に兎とも熟兎とも判然せぬ種類が多い
と筆し居る。熟兎はレプス等の諸兎と別に一属を立てすなわちそ
の学名をオリクトラグス・クニクルスという。野生の熟兎は兎よ



り小さく耳と後脚短く頭骨小さくて軽い。しかのみならず兎児は毛生え眼開いて生まれ、生まると直ぐに自ら食を求めて親を煩わさず自活し土を浅く窪くぼめてその中に居るに、熟兎児は裸で盲で生まれ当分親懸り、因つて親が地下に深く孔あなを掘り通してその裏うちで産育する、一八九八年版ハーチングの『熟兎篇ゼ・ラビット』に拠ると原と熟兎はスペイン辺に産しギリシアやイタリヤやその東方になかった。古ユダヤ人もこれを知らずしたが『聖書』に見えず、英訳『聖書』に熟兎コニーとあるはヘブリウ語シャプハンを誤訳したのでシャプハン実は岩ヒラクス兎を指すとある。岩兎は外貌が熟兎に似て物の骨こっかく骼その他の構造全く兎類と別で象や河馬かば等の有蹄獸の一属だ。この物にも数種あつてアフリカとシリアに産す（第三図は



南アフリカ産ヒラクス・カベンシス）。巖の隙間に棲み番兵を置

いて遊び歩き岩面を走り樹に上るは妙なり、その爪と見ゆるは実

は蹄ひづめで甚だ犀さいの蹄ひづめに近い（ウツド『イラストレテッド・ナチユラル・ヒスト博物 画 譜

リ』卷一）。却説さて兔と熟兔は物の食べようを異にす、たとえば蕪か

菁ぶを喫くらうるに兔や鼠は皮を剥はいで地に残し身のみ食うる、熟兔は

皮も身も食べて畢しまう。また地に生えた蕪菁を食うに鼠は根を食い

廻りて中心を最後に食うに熟兔は根の一侧から食い始めて他側に

徹す（ハーチング、六頁）。ストラボンの説に昔マヨルカとミノ

ルカ諸島の民熟兔過ふえすぎ殖つかて食物を喫くい尽くされローマに使つかを遣つかわ

し新地を給い移住せんと請うた事あり、その後熟兔を獵かり殲つくさん

とてアフリカよりフェレットいたち（鼬の一種）を輸入すと、プリニウ

スはいわくバレアリク諸島に熟兎おお夥おほくなつて農穫全滅に瀕しその
住民アウグスツス帝に兵隊を派してこれを禦ふせがんと乞えりと、わ
が邦にも狐狸を取り尽くして兎ぼっこ跋扈ぼっこを極め農民困くるしむ事しばしば
あるが熟兎の蕃殖はまた格別なもので、古く地中海に瀕せる諸国
に播ひろがり十九世紀の始めスコツトランドに甚まれだ稀まれだったが今は夥
しく殖えイングランド、アイルランドまたしかり、オーストラリ
アとニュージールランドへは最初遊獵か利得のため熟兎を移すとた
ちまち殖えて他の諸獸を押し農作を荒らす事言語に絶し種々根絶
の方法を講じ居るが今に目的を達せぬらしい。しかしおかげで予
ごとき貧生は在英九年の間、かの地方から輸入の熟兎の缶詰を常
食して極めて安値に生活したがその仇をビールで取られたから何

にも残らなんだワハハハ。日本に熟兔を養う事数百年なるもかかる患害うれいを生ぜぬは土地氣候等が不適なはもちろん、生存競争上その蕃殖を妨ぐるに力ある動物が多い故と惟おもう。しかし熟兔はなくとも兎ばかりでも弱る地方多きは昔よりの事でその害を防ぐ妙案が大分書物に見える。例せば『中陵漫録』五にいわく「兔蕎麦そばの苗を好んで根本より鎌で刈つたごとく一畦うねずつ食い尽くす、その他草木の苗も同じく食い尽くす事あり、いかようにしても防ぎがたし、これを防ぐには山下の粘土を取り水にてよく泥に掻き立てその苗の上より水を灌そそぐがごとく漑そそぎ掛くれば泥ことごとく莖葉の上に乾き附いてあえて食う事なし、苗の生長には障さわらず、および圃ほの周り二畦三畦通りもかくのごとくすれば来る事なし、圃の

中まで入りて食う事を知らず、米沢の深山中で山農の行うところなり」と、これより振ふるつた珍法は『甲子夜話』十一に出で平戸ひらとで兎が麦畑を害するを避けんとて小さき札に狐の業わざと兎が申すと書く、狐これを見て怒りて兎を責むるを恐れ兎害を止めると農夫伝え行う、この札立つれば兎難必ずやむは不思議だとある。英国にも兎ヘヤー・パス径ヘヤー・パスという村や野が数あり兎が群れてその辺を通つたからこの名を生じた。兎の通路は熟兎のよりも一層判はつきり然するといふ事だが、わが邦の兎道うじなどいふ地名もこのような起因かも知れぬ。それから支那で跳兎、一名蹶鼠げっそというはモレンドルフ説にジプス・アンタラツスでこれは兎と同じ齧齒獣だが縁辺やや遠く、『本草綱目』に「蹶は頭目毛色皆兎に似て爪足鼠に似る、前足わずか

寸ばかり、後足尺に近し、尾また長くその端毛あり、一跳^{とび}数足、止まるとすなわち蹶^{つまず}き仆^{たお}るゝと出^いづ、英語でジャーボアといいて後脚至つて長く外貌習慣共にオーストラリアのカンガルーに似た物だ（第四図）。『孔叢^{こうそう}子』にこの獸甘草^{かんぞう}を食えば必ず^{きよう}蛩^{きよう}々^{きよう}として青色馬^{あおうま}に似た獸と※※^{きよきよ}として騾^らのごとき獸とに遺^{のこ}す、二獸、人來るを見れば必ず蹶^{つまず}を負うて走る、これは蹶^{つまず}を愛するでなくて甘草欲しさだ、蹶^{つまず}も二獸の可愛さに甘草を残すでなく足を仮るためじやとある、まずは日英同盟のような利害一遍の親切だ、『山^せ海^{かい}經^{きやう}』にへ飛兔背上毛を以て飛び去るゝとあるも跳兔らしい。

第4図 跳兔



東洋でも西洋でも古来兎に關し随分間違つた事を信じた。まず『本草綱目』に『礼記』に兎を明めい※しといったはその目瞬まばたかずに瞭然たればなりとあるは事實だが兎に脾臟なしとあるは實際どうか。また尻に九孔ありと珍しそうに書きあるが他の物の尻には何いくつ孔あるのか、随分種いろいろ々と物を調べた予も尻の孔の数まで行き届かなんだ。ただし陳蔵器ちんぞうきの説にへ兎の尻に孔あり、子口より出づ、故に妊婦これを忌む、独り唇欠くためにあらざるなり、ただ尻に孔あるばかりでは珍しゆうないがこれは兎の肛門ほとりの辺に数穴あるを指さしたので予の近処の兎狩専門の人に聞くと兎は子を生むとたちまち自分の腹の毛を掻きむしりそれで子を被うと言つた。牛が毛玉を吐く例などを比較してこの一事から子を吐くと言

い出たのだろ。しかして支那の妊婦は兎を食うて産む子は痔持ち
 になつたり毎度嘔吐はいたりまた欠唇いくちに生まれ付くと信じたのだろ
 う。『雅』に咀嚼するものは九竅ききょうにして胎生するに独り兎は雌
 雄とも八竅にして吐生すと見え、『博物志』にはへ兎月を望んで
 孕み、口中より子を吐く、故にこれを兎とという、兎は吐なりと
 出づ。雌雄ともに八竅とは鳥類同様生殖と排穢の両機が一穴に兼
 備され居るちゆう事で兎の陰具は平生ちよつと外へ見えぬから
 い出したらしい、王おうじゆう充ちゆうの『論衡ろんこう』に兎の雌は雄の毫けを舐なめ
 て孕むとある、『楚辞』に顧兎とあるは注に顧兎月の腹にあるを
 天下の兎が望み見て気を感じて孕むと見ゆ、従つて仲秋月の明暗
 を見て兎生まるる多少を知るなど説き出した。わが邦でも昔は兎

を八竅きようと見た物か、従来兔を鳥類と見做みなし、獸肉を忌む神にも供えまた家内で食うも忌まず、一疋二疋と数えず一羽二羽と呼んだ由、古ギリシアローマの学者またユダヤの学僧いずれも兔を両性を兼ねたものとしてしばしばこれを淫穢いんえ不浄の標識とした（ブラウン『俗説弁惑』三卷十七章）。ブラウンいわくこれは兔の雌雄ともに陰具せんばの傍に排泄物を出す特別の腺せんその状こうが丸んごとときあり、また肛門の辺に前に述べた数孔あり、何がな珍

説を出さんとする輩これを見て兔の雌に辜丸あり雄に牝戸ありとしたりしい。しかのみならず、兔の陰部うしろ後に向い小便を後へ放つ

もこの誤説もとの原もとだつたらうと。一七七二年版コルネリウス・ド・

パウの『亜米利加土人の研究』卷二、頁九七

には兎にも熟兎にも雌の クリトリス 吉 舌 非常に長く陽物に酷似せるもの
 少なからず、これより兎は半男女ふたなりといひ出したと出づ。支那にも
 似た事ありて『南山經』や『列子』にへ類自ら牝牡を為す、食う
 者妬まず、類は『本草綱目』に じゃこうねこ 靈 狸 の事とす。『嬉遊笑覽』
 九にいわく「『談往』に馮相詮という少年の事をいって『異物志』
 にいわく靈狸一体自ら陰陽を為す、故に能く人に媚ぶ皆天地不正
 の氣云々」。これは靈狸の陰辺に シヴェット 靈狸 香を排泄する腺孔あるを
 見て牡の体に牝を兼ねると あやま 謬つたので古来 ヒエーナ 斑 狼が半男女だとい
 う説盛んに欧州やアフリカに行われたのも同じ事由と知らる。ま
 たブラウンは兎が既に孕んだ上へまた交会して孕み得る特質ある
 をその姪獸の名を博した一理由と説いたが、この事は兎が殖えや

すい訳としてアリストテレスやヘロドツスやプリニウスが夙く述べた。それから『綱目』にへ『主物簿』いう孕環ようかんの兎は左腋いだに懐く毛に文采あり、百五十年に至りて、環脳に転ず、能く形を隠すなり、王相の『雅述』にいわく兎は潦を以て鼈と為り鼈は早を以て兎と為る、熒惑けいわく明らかならざればすなわち雉兎ちを生むとあやし奇い説を引き居る。『竹生島ちくぶしま』の謡曲に緑樹りよくじゆ影沈んで魚樹あやしに登る景色あり月海上に浮かんで兎も波を走るか面白の島の景色やとあるは『南畝莠言なんぼいうげん』上に拠ると建長寺僧自休が竹生島に題せる詩の五、六の句へ樹影沈んで魚樹に上り、清波月落ちて兎流れに奔るはしとあるを作り替えたのだ。予が見たところ兎を海へ追い込んだり急流に投げ込んだりすると直ぐに死んだので右の句

はただ文飾語勢を主とした虚構と思つていたが、仏経にしやうもん 声聞
 を兎川を渡る時身全く水にうか 泛ぶに比し、ウツドの『イラストレーテッド 博 物
 ・ナチュラル・ヒストリー

画 譜 『卷一に兎敵を避くるに智巧を極め、犬に嗅ぎ

付けらるるを避けんとて流水や大湖に躍り入り長距離を泳いで遠
 方へ上陸し、また時として犬に追究されて海に入り奔波を避けず
 して妙に難を免るるある由記せるを見て、くだん 件の謡や詩の句はまる
 で無根でないと知つた。

上述のごとく兎は随分農作を荒らしその肉が食えるから、兎猫
 古くより諸国に行われた。『淵鑑類函』四三一に后こうげい 羿巴山に獵
 しうきぎつま 大きな驢うきぎつま ほどなる兎を獲た、その夜夢に冠服王者のごとき人が、
 羿にいうたは我はえんぷくん 扶君としてこの地の神じや、汝我を辱めた

罰としてまさに手を逢蒙に仮らんとすと、翌日逢蒙羿を弑して位を奪うた。今に至つてもその辺の土人は兔を獵らぬと見え、また後漢の劉昆弟子常に五百余人あり、春秋の饗射ごとに桑弧蒿矢もて兔の首を射、梟宰すなわち吏属を率いてこれを観たとあり、遼の国俗三月三日木を刻んで兔とし朋を分けて射た、因つてこの日を陶里樺（兔射）と称えたと出づ。これは兔害を厭勝のため兔を射る真似をしたのだろ。天主僧ガーピヨンの一六八八至一六九八年間康熙帝の勅を奉じ西韃鞑を巡回した紀行（アストレイ

ア・ニコウ・ゼネラル・コレクシヨ・オヴ・ウオエージス・エンド・トラウエルス
 『新編紀行航記全集』卷

四、頁六七六）に帝が露人と講和のため遣わした一行がカルカ辺で兎狩した事を記して歩卒三、四百人弓矢を帯びて三重に兎ども

を取り巻き正使副使と若干の大官のみ囿中に馬を馳せて兎を射、
 三時間足らずに百五十七疋取った。兎雨と降る矢の下に逃げ道を
 覓め歩卒の足下を潜り出んとすれば歩卒これを踏み殺しました蹴り
 戻す、あるいは矢を受けながら走りあるいは一足折られ三足で逃
 れ廻る、囿中また徒士立ちて大なる棒また犬また銃を用いて兎の
 逃げ出るを防いだとあつて、兎狩も大分面白い物らしいが、熊楠
 はこんな人騒がせな殺生よりはやはり些少ながら四、五升飲む
 方がずっと安楽だ。文政元年より毎年二月と九月に長崎奉行兎狩
 に託して人数押えを行つた由（『甲子夜話』六四）、いずれそ
 れが済んだ後で一盃飲んだのでしよう。『類函』四三一にへ『張
 潘漢記』曰く梁冀兎苑を河南に起す、檄を移し在所に生兎を調

発す、その毛を刻んで以て識しるしと為す、人犯す者あれば罪死に至る
 〳、何のためにかくまで兎を愛養したのか判らぬ。英国でもゼー
 ムス二世の時諸獣の毛皮を着る事大流行じやつたが、下等民も御
 多聞もに洩れずといつて銭ちやんはなし兎の皮を用いたので、ロンドン界か
 隈いは夥しく兎畜養場が立つたという（サウシ『随コンモンプレース・ブ得手
 録』一および二）。

『礼記』に兎を食うに尻を去ると見ゆるは前述異様の排泄孔など
 ありて不潔甚だしいかららしい。兎肉の能毒について『本草綱目』
 に種々述べある。陶弘景は兎肉を羹とせば人を益す、しかし妊婦
 食えば子を欠唇ならしむと言つた。わが邦でも『調味故実こじつ』に兎
 は婦人懐妊ありてより誕生の百二十日の御祝い過ぐるまで忌むべ

しと見ゆ。スウエーデンの俗信ずらく、木に楔くさびを打ち込んで半ば裂けた中に楔を留めた処や兎の頭を見た妊婦は必ず欠唇の子を生むと、一体スウエーデン人はよほど妊婦の心得に注意したと見えて妊婦が鋸台の下を歩けば生まるる子の喉が鋸を挽くように鳴り続け、斑紋ある鳥卵を食えば子の膚あは糙あらくて羽を抜き去った鶏の膚のごとし、豚さわを触さわれば子が豚様に呻うめき火事きずや創きずある馬を見れば子に痣あざあり、人屍の臭いを嗅げば子の息臭く墓場を行くうち棺腐れ壞れて足を土に踏み入るれば生まるる子癩てんかんもち癩持もちとなるなど雑多の先兆つらを列ねある（一八七〇年版ロイド『ピザント・ライフ・イン・スエデ』活ん九〇頁）。しかし母が妊娠中どうしたら南方先生ほどの大酒家を生むかは分らぬと見えて書いていない。一六七六年版タヴ

エルニエーの『波斯紀行』にはペルシア拜火教徒兔と栗鼠リスは人同様その雌が毎月経水を生ずとて忌んで食わぬとある。果して事実なりや。『抱朴子』に兔血を丹と蜜に和し百日蒸して服するに梧きりのこ子の大さきさのもの二丸ずつ百日続け用ゆれば神女二人ありて来り侍し役使すべしとある、いかにも眉睡な話だが下女扠底の折から殊に人間に見られぬ神女が桂庵なしに奉公に押し掛け来るとはありがたから一つ試ためして見な。欧州にもこれに劣らぬ豪えらい話があつてアルペルツス・マグヌスの秘訣に人もし兔の四足と黒鳥マールの首を併あわせ佩おぶればたちまち向う見ず無双となつて死をだも懼おそれず、これを腕に付くれば思い次第の所へ往きて無難に還るを得、これに鼪いたちの心臓を合せて犬に餌えばその犬すなわち極めて猛勢となつて殺さ

れても人に順したがわずと見ゆるがそんなものを拵こしらえて何の役に立つのかしら（コラン・ドー・ブランチー『ジクシヨネール・アンフェルナル妖怪事彙』第

四版二八三頁）。米国の黒人は兔腦を生で食えば脳力を強くしまたそれを乾ほして摩すれば齒痛まずに生えると信ず（一八九三年版

『オールド・ラビット・ゼ・ヴーズー老兔巫蠱篇』二〇七頁）。陳蔵器曰く兔の肉を久

しく食えば人の血脈を絶ち元氣陽事を損じ人をして痿黄いおうせしむと、

果してしからば好色家は避くべき物だ。また痘瘡に可否の論が支

那にある（『本草綱目』五一）。予の幼時和歌山で兔の足を貯え

置き痘瘡を爬かくに用いた。これその底に毛布を着たように密毛叢そ

生うせいせる故で予の姉などは白粉おしろいを塗るに用いた。ペピイスの

『ダイヤリー日記』一六六四年正月の条に兔の足を膝関節込みに切り取

つて佩ぶれば疝痛起らずと聞き、笑い半分試して見ると果して

効いたとある。鰯の頭も信心と云うが護符や呪術じゆじゆつは随分信ぜ

ぬ人にも効く、これは人々の不サブリミナル・セルフ自覚識セルフに自然感受してから

身体の患部に応通するのだとマヤースの『ヒューマン・パーソナ

リチー篇』に詳論がある、私なんかも生来の大酒だったが近年あ

る人から妻が諫めて泣く時その涙を三滴布片に落してもらいそれを

袂たもとに入れ置くと必ずどんな酒呑みもやまる物と承りましてその通

り致し当分めつきりやみました。プリニウスの『博物志ヒストリア・ナチュラ

リス』八卷八一章に兎の毛で布を織り成さんと試みる者あつたが皮

に生えた時ほど柔らかならずかつ毛が短いので織ると直ぐ切れて

しもうたと見ゆ、むやみに国産奨励など唱うる御役人は心得て置

きなはれ。『塩尻』卷三十に「或る記に曰く永享七年十二月天
まのみんなのしよう
 野民部少輔遠幹その領内秋葉山で兎を狩獲信州の林某に依りて
 徳川殿に献ず、同八年正月三日徳川殿うたいぞめ謡初にかの兎を羹とし
 たまえり松平家歳首さいしゆ兎の御羹これより起る、林氏この時ふきしう露の羹
 を献ぜしこれ露の臺の権輿はじまりと云々」とあるは可い思いい付きだ、
 時節がら新年を初め官吏どもの遊宴には兎と露の臺ばかり用いさ
 せたら大分の物入りが違ちがうだろ。本邦では兎ちなに因ちなんだ遊戯はない
 ようだが英国には兎ヘヤー・エンド・ハウンドおよび獵犬ちゆうのがあつて、若者一人
 兎となつてまず出立し道中諸処に何か落し置くを跡の数人獵犬と
 なつてこれを追つゐ踪捕獲するので一同短毛ジャージー褐はやを着は迅はやく走るに便
 にす、年中季節を問わず土曜の午後活潑な運動を好む輩しわざの所為だ

が余り動きが酷ひどくてこれに堪えぬ者が多いという（ハツリット

『信念および民俗』一九〇五年版卷一、頁三〇五）。予

はそんな事よりやはり寝転んで盃ばい一いちがいいというと言者は今の

さき妻の涙で全然酒がやんだといったじやないかと叱るだろ。そ

れから『今昔物語』に大和国やまとのくにに殺生を樂しんだ者ありて生きな

がら兎の皮を剥はいで野に放つとほどなく毒瘡その身を腐爛して死

んだと載せて居る。故ロメーンスは人間殊に小児や未開人また猴さる

や猫に残忍な事をして悦樂する性ある由述べた。すなわち猫が鼠

を捉えて直ちに啖くわず、手鞠てまりにして抛げたりまた虚眠して鼠その

暇を伺い逃げ出すを片手で面白そうに掴んだりするがごとし。わ

が邦の今も小児のみか大人まで蟹の両眼八足を抜いて二※つめのみで

ある
行かせたり蠅の背中に仙人掌サボテンの刺とげを突つ込みのほりとして競争させた
り、警察官が婦女を拘留して入りもせぬ事を根問ねどいしたり、前和
歌山県知事川村竹治が何の理由なく国会や県会議員に誓うた約束
をたちまち渝ほぐして予の祖先来数百年奉祀し来つた官知社を潰しひ
とえに熊楠おこを憤おこらせて怡よろこぶなどの類で、いずれも仏眼もて観みれ
ば仏国のジル・ド・レッツが多数の小児を犯姦致死して他の至苦
を以て自分の最樂と做なしたに異ならぬ。川村の事は只ただいま今グラス
ゴウ市の版元から頼まれて編み居るロンドン大学前総長フレデリ
ク・ヴィクトル・ジキンス推奨の『南方熊楠自伝』にも書き入れ
居るから外国までの恥曝さらしじや。とにかくかかる残忍性多き者が
平気でおらるるこの世界はまだまだ開明などとは決して呼ばれぬ

べきはずだ。さて一寸の虫にも五分の魂でマヤースの『ヒューマン・パーソナリティー』に犬にも幽霊ある事は予も十数年研究していささか得たところあるが不幸にも観る人の心を離れて幽霊という物ある証拠を一も得ない。しかもし人に幽霊あらば畜生にも幽霊あるべしで、『淵鑑類函』四三一に司農卿揚邁ようまいが兎の幽霊に遇つた話を載せ、『法苑珠林』六九に王將軍殺生を好んでその女兎鳴の音のみ出して死んだとある。

『治部式』じぶしきに支那の古書から採つて諸多の祥瑞を挙げた中に赤兎上瑞、白兎中瑞とある、赤兎はどんな物か知らぬが、漢末にへ人中に呂布あり馬中に赤兎ありと伝唱された名馬の号から推すと、まずは赤馬様の毛色の兎が稀まれに出るを上瑞と尊んだのだろ、『類

函』にへ『後魏書』、兔あり後宮に入る、門官檢問するに従つ
 て入るを得るなし、太祖崔浩をしてその咎きゆううちよう 徴を推せしむ、
 浩おもえ以為らくまさおもえに隣国 嬪ひんしやう 嬙を貢する者あるべし、明年姚興やうこう
 果して来り女を献ず、すなわち白兔は色皙の別嬪が来る瑞兆しるしで、
 孝子の所へも来る由見え、またへ王者の恩耆老に加わりまた事に
 応ずる疾はやければすなわち見るあらわとあつて、赤兔はへ王者の徳盛ん
 なればすなわち至るいと出づ。『古今注』にへ漢の建平元年山陽
 白兔を得、目赤くして朱のごとしとあれば、越後兔など雪中小白
 くなるを指したのでなく尋常の兔の白子を瑞としたのだ。熟兔に
 白子多きは誰も知る通りだが明の崇禎の初め始めて支那へ舶来、
 その後日本へも渡つたらしい（『本草啓蒙』四七）。黒兔は以前

瑞としなかつたが石^{せき}勒^{ろく}の時始めて水徳の祥とした。プリニウス
 いわく越後兎冬白くなるは雪を食うからと信ぜらると。何ぼ何で
 も雪ばかりじゃあ命が続かぬが、劉向の『説苑』一に弦章齋景公
 に答えた辞中、尺^{しやく}蠖^く黄を食えばその身黄^{あおき}に蒼を食えばその
 身蒼しとあれば、動物の色の因をその食物に帰したのは東西一轍
 と見える。ただし只今いわゆる保護色も古く東西の識者に知れい
 たは、唐の段成式の『西陽雜俎』^{ゆうようざつそ}に顛^{つちぐも}当蠅^{とうりゅう}を捉えて巢に入り
 その蓋を閉じると蓋と地と一色^{とも}で並に糸隙の尋ぬべきなしと自分
 の観察を筆し、またおよそ禽獸は必ず物影を蔽匿して物類に同じ
 くす、これを以て蛇色は地を逐い茅^{かやう}兔^{さぎ}（茅の中に住む兔）は
 必ず赤く鷹の色は樹に随うと概論したはなかなか傑^{えら}い。明治二十

七年予この文を見出し『ネーチュル』へ訳載し大いに東洋人のために気を吐いた。その時予は窮^{きゆう}巷^{かう}の馬小屋に住んでいたが確か河瀬真孝子が公使、内田康哉子が書記官でこれを聞いて同郷人中井芳楠氏を通じて公使館で馳走に招かれたのを他人の酒を飲むを好かぬとして断わったが、河瀬内田二子の士を愛せるには今も深く感佩^{かんぱい}し居る。前に述べた川村竹治などはまるで較べ物にならない、その後プリニウスを読むと八卷三十五章に蛇が土と同色でその形を隠す事は一汎^{いつぱん}に知らる、九卷四八章に章魚^{たこ}居処に随つて色を変ずとあつた。

『本草啓蒙』に「兎の性狡^{こう}にして棲所の穴その道一ならず、獵人一道を燻^{ふすぶ}れば他道に遁^{のが}れ去る、故に『戦国策』に「狡兎三窟あり

わずかにその死を免れ得るのみ」という。兎は後脚が長くてすこぶるはや速く走りその毛色が住所の土や草の色と至つて紛らわしき上に至つてずる黠く、細心して観察した人の説にその狡智狐にが駕すという。例せば兎能くよ獵犬がその跡を尋ぬる法を知り極めて巧みに走つてあと蹟をくら晦ます。時として長距離をすす前みはし奔つて後同じ道筋を跡へ戻る事数百ヤードにしてたちまち横の方へ高たかとび跳して静かにかく匿れ居ると犬知らず前へ行つてしまふ。その時兎たちまち元の道へ跳ね戻り犬と反対の方へ逃れ去る。また自分の足に最も適し、犬の足に極めて不利な地を択んで走る事妙なり（ウッド、同前）。されば米国の黒人は兎を食えばその通り狡黠敏捷になると信じ（オエン、二三〇頁）、アフリカのバンツ人の俗譚に兎動物中の

最も奸智あるものたれば實際を知らざる者これを聞き書がする時ス
 ングラ（兎）を狐と誤訳した（一九〇六年ワーナー『英ゼ・ネチヴス・領中
 オヴ・ブリチシユ・セントラル・アフリカ
 央 亞非利 加土人篇』二三二頁）。露国の話に兎熊児を
 噛わらい唾を吐き掛けたので母熊怒つて追ひ来るを兎うま旨く逃げて熊窠
 に陥るとあり、蒙古に満月の夜兎、羊と伴つれて旅立つを狼襲うて
 羊を啖わんとす、その時兎偽つてわれは 帝たいしやく 釈やくの使で狼千足の
 皮を取りに来たと呼ばわり狼怖れて逃げた物語あり、わが邦の
 「かちかち山」の話も兎の智計能く狸を滅ぼした事を述べ、『五
 雜俎』九に「狡兎は鷹来り撲うつに遇えばすなわち仰ぎ臥し足を以
 てその爪を撃はくしてこれを裂く、鷹すなわち死す云々、また鷹石に
 遇えばすなわち撲つあたわず、兎これを見てすなわち巖石の傍に

依つて旋轉す、鷹これを如何いかにともするなし云々、『イソツプ物

語』に鷺に子を啖われた熟兔樹を根抜きに顛覆てんぷくし鷺の巢中の子

供を殺した話見え、インドに兔己れを食わんとする獅子を欺き井

に陥るる話あり。またいわく月湖つきのうみべ辺に群兔住み兔の王を葬ヴイガヤ

王ダソタと号なづく。象群多くの兔を踏み殺せしを憤り兔王象王に月諸

象を悪にくめりと告ぐ。象月を見んと望みければすなわちこれを湖畔

に伴れ行き水に映れる月影を示す。象月に謝罪せんとして鼻を水に

入るるに水掻き月影倍多ふえたり、兔象に向い汝湖水を擾みだせし故月い

よいよ曠いかると言い象ますます惶おそれ赦ゆるしを乞い群象を帥ひきいてその地を

去る、爾後じご兎群静かに湖畔に住んで永く象害を免ると（一八七二

年版グベルナチス『動物譚原』卷二章八）。かく狡智に

富む故兎を神とした人民少なからず。すでに『古事記』に兎神を
 載せ、今も熊野で兎を巫伴みこともと呼ぶは、狼を山の神というから狼
 の山の神に近侍し傳令する女巫みこと見立てたのだろ。『抱朴子』に
 へ山中卯日丈人じょうじんと称える者は兎なり。和漢ともにこれを神
 物として直ちに本名を呼ぶを忌むのだ。兎神が逢蒙をして后羿こうげい
 を殺さしめた話は既に上に述べた。南米のチピウヤン人信じたは
 大兎神諸獸を率いて水に浮び大洋底より採った砂粒一つもて大地
 を造り部下の諸獸を人間に化なした。しかるに水王たる大虎神これ
 を拒んだので二神争闘今に至るも息やまぬと（コラン・ド・ブラン
 チ、二八四頁）。また北米住アルゴンキン人は兎神ミチャボを最
 高神とし東方に住むとも北方に棲むともいい、人死すればそこへ

往くと信ず（『エンサイクロペジア・ブリタニカ大英類典』十一版二卷）。仏教薬師

十二神中兎神あり。『大集経』二十二に浄道窟の兎天下を遊行ゆぎよう

して声聞しょうもんじよう乗を以て一切兎身衆生を教化きようけし離悪勧善せしむ

とあるは兎中の兎仏ともいうべきものありと説いたので、『宝星

陀羅尼経』三に仏が首楞嚴しゆりようごんざんまい三昧に入ると竜に事つかうるもの象

に事うるものの眼には竜象と見え兎神に事うるものは仏を兎形に

見るとあるから、察するにその頃インドに兎を族靈トテムと奉尊する民

俗があつたらしい、別項虎に関する伝説と民俗とに述べた通り、

族靈とは一族とある物との間に切るに切れぬ縁ありと信ずるその

物をその一族の族靈というので、予は先年『人類学雑誌』上でわ

が邦諸神の使い物は多くその神を奉ずる一族の族靈たりし由を説

いた。例せば確か兎は氣比宮か白山の神使だった、ローマのカイゼルが英国に討ち入った時兎雄鷄鷲を食わぬ民あつたと記したが、その風近世まで残り兎を畜こうてこれを殺さんとする者その由を兎に告げると兎自殺したという。ビツデンハムでは九月二十二日ごとくに白兎を緋の紐で飾り運んでアガサ尊者ヒムンの頌を歌い村民行列す。未婚の女これに遇わば皆左手の拇おやゆび指と食指を伸して兎に向い処女よ処女よ他かれをここに葬れと唱う。その意味十分に判らぬが昔兎を族霊として厚く葬った遺風とだけは確かに知れる（一九〇八年版ゴム『歴史科学としての民俗学』二八七頁）。西暦紀元六十二年駐英ローマ兵士がイケニ種の寡后ポアジケアを打ちその二女を強姦せしよりポアジケア兵を挙げた時、后ふところまず懐より兎を出しそ

の動作を見て必勝とうらな卜い定め臣下皆そのつもりで勇み立ちてたち
 まちローマ方七万人をおうさつ麤殺したがついに兵敗れて後は自ら毒を
 仰いで死んだ。これ古ブリストン人が兔を族霊として卜占に用い
 たのだとゴムは論じた。ただしかの後の当の敵たるローマ人また
 兔を卜に用い食用として殺さなんだ（ハツリツト、同前）。熊楠
 その卜法の詳しきを知り得ぬが、プリニウス十一卷七三章にブリ
 レツム辺等の兔は二肝あり他所へ移せば一肝を失うとあるを見る
 といわゆる肝アンチノボマンシー卜法をローマ人専ら兔に施したらしい。アボ
 ットの『マセドニア民俗』（一〇六頁）にアルバニア人のある種
 族は今に兔を殺さずまた死んだ兔に触れぬと見ゆ。キリスト教国
 で復活節に卵を彩り贈るが常で、英国ヨーク州ではこれを小さき

鳥巢に入れて戸外に匿し児童をして捜し出さしむるに、スワビアでは兎の卵とて卵とともに兎を匿し、ドイツの諸部ではこの日卵焼の兎形の菓子を作る。わが邦にも古く伏兎という菓子あり、兎に似せた物と聞くが実否は知らぬ。復活節をイースターというはアングロ・サクソン時代に女神エストルをこの節祭ったから起る。思うにこの神の使物が兎で英国（ならびにドイツ等？）有史前住

民の春季大祭に兎を重く崇めた遺風だろうとコックスが説いた

（『アン・イントロダクシヨン・ツー・フォーークロール』
民俗学入門 門 一〇二頁）。熊楠謹ん

で攷うるに、古エジプト人は日神ウンを兎頭人身とす、これ太陽

晨あしたに天に昇るを兎の蹶起けつきするに比したんじや（バッジ『埃ゼ・ブック』及

諸神譜』卷一）。兎を月氣とのみ心得た東洋人には変

な事だ。コックス説に古アリア人の神誌に、春季の太陽を紅また金色の卵と見立て、後のちキリスト教興るにおよびこれを復活の印相としたという。しからは古欧州にもエジプト同前日を兔と見立てた所もあつて卵と見立てたのと合併して、只今復活節イースターにいわゆる兔の卵を贈りまた卵焼の兔菓子を作る事となつたのであろう。けだし冬以来勢いかす微かなりし太陽が春季に至つてまた熾さかんなるを表示したのだ。老友マクマイケル言ひしはドイツでは村人この日兔を捕え殺して公宴を張る所多しと。大抵族靈トテムたる動物を忌んで食わぬが通則だが、南洋島民中に烏賊いかを族靈としてこれを食うを可よしとするのもある（『大英類典』第九版トテムの条）。ドイツ人がもと族靈たりし兔を殺し食うも同例で、タスマニア人が老親を

絞殺して食いしごとく身内の肉を余所の物に倣してしま了うは惜しいという理由から出たのだろ。サウシの書（前出）に若いポルトガル人が群狼に襲われ樹上に登って害を免がれ後日の記念にその樹を伐り倒し株ばかり残して謝意を標しるした。カーナーヴオン卿その株を睹み由来を聴いて、英人なら謝恩のためこの樹を保存すべきに葡人はこれを伐った、所異かわれば品異しなるも甚だし、以後この人がどんな難に遇うを見ても我は救わじ、救うて御礼に殺されちや詰まらぬと評したとある。先祖来護りくれた族霊を殺し食うてその祭を済ますドイツ人の所行これに同じ。しかし日本人も決して高くドイツ人を笑い得ず、予が報国の微衷もて永ながなが々紀州のこの田舎で非常の不便を忍び身命を賭して生物調査を為なし、十四年一日の

ごとく私財を蕩^{とう}尽^{じん}して遣^やつて居るに、上に述べた川村前知事ごとき渝^ゆ誓^{せい}してまで侮辱を加え来る者がすこぶる少なからぬからと
いうて置く。

民俗学者の説に諸国で穀を刈る時少々刈らずに残すはもと地を
崇めしより起る。例せばドイツで穀^{こく}母^{のは}、大母^{おおは}、麦新婦^{むぎのよめ}、
燕^{からすむぎのよめ}、小麦新婦^{むぎのよめ}、英国で収^{とり}穫^{いれ}女^{じよ}王^{おう}、収^{とり}穫^{いれ}貴^き婦^{ふじん}人^{ひと}など称し、刈
り残した稈^{わら}を獸形に作りもしくは獸の木像で飾る、これ穀^{こく}精^{のせい}
を標するのでその獸形種々あるが、欧州諸邦に兎に作るが多い、そ
の理由はフレザーの大著『金^{ゴルズン・パウ}樞^{シュ}篇^{ペン}』に譲り、ここにはただこ
んな事があると述べるまでだ。グベルナチス説に月女神ルチナは
兎を使い出産を守る。パウサニアスに月女神浪人都を立てんとす

る者に教え兎が逃げ込む林中に創立せしめた譚はなしを載す。インドにもクリアン・チャンド王狩りすると兎一疋林に入りて虎と化けた、「兎ほど侮りや虎ほど強い」という吉瑞と判じてその地にアルモウー城を建てたという。英国で少女が毎月朔ついたち日最初に言うとしてものいラビットラビット熟ラビット兎と高く呼べばその月中幸運を享うく、烟突えんとつの下から呼び上ぐれば効驗最も著しく好よき贈品随つて来るとか（一九〇九年発行『ノート・エンド・キーリス随筆問答雜誌』十輯十一卷）。『古事記』におおくにぬし大國主その兄弟に苦しめられた兎を救い吉報を得る事あり、これらは兎を吉祥とした例だが兎を悪兆とする例も多い。それは前述通りこの獣半男女また淫乱故とも、至つて怯懦きょうだ故とも（アボット、上出）、またこれを族靈として尊ぶ民に凶事を知らさんとて現わるる故

(ゴム、上出)ともいう。すべて一国民一種族の習俗や信念は人類初めて生じてより年代紀すべからざる永歳月を経種々無限の遭際を歴て重疊千万して成つた物だから、この事の原因はこれ、かの事の起源はあれと一々判然と断言しがたく、言わば兎を半男女また淫獣また怯懦また族霊としたから、兎が悪兆に極められてしもうたと言うが一番至当らしい、さて予の考うるは右の諸因のほかに兎が黠智かつちに富むのもまた悪獣と見られた一理由だろ。獵夫から毎度聞いたは獵に出懸ける途上兎を見ると追い懸けて夢中になる犬多く、追えば追うほど兎種々に走り躲れて犬ために身憊れつか心乱れて少しも主命を用いず、故に狩獵の途上兎を見れば中途から還かえる事多しと、したがって熊野では獵夫兎を見るのみかはその名

を聞くばかりでも中途から引き還す。アボットの書（上出）にマセドニア人兎に道を横ぎらるるを特に凶兆とし、旅人かかる時その歩かちだち立と騎馬とに論なく必ず引き還す。熟兎や蛇に逢うもまたしかり。スコットランドや米国でもまたしかり。ギリシアのレスボス島では熟兎を道で見れば凶、蛇を見れば吉とすと見ゆ。英国のブラウン（十七世紀の人）いわく当時六十以上の人兎道を横ぎるに逢うて困らざるは少なしと。ホームこれに追加すらく、妊婦と伴れて歩く者兎道を横切るに遭わばその婦の衣を切り裂きてこれを厭まじないすべしと。フォーファー州シャーの漁夫も、途を兎に横ぎらるれば漁に出でず（ハツリット、同前）。コーンウォールの鉱夫金掘りに之ゆく途中老婆または熟兎を見れば引き還す（タイロル『原プリミ

チヴ・カルチュール
 始 人文篇』卷一、章四)。兎途を横ぎるを忌む事欧州のほ

かインド、ラブランド、アラビア、南アフリカにも行わる（コックス、一〇九頁）。ギリシアではかかる時その人立ち駐りて兎を見なんだ人が来て途を横ぎるを俟ちて初めて歩み出す（コラント・ブランド、前出）。スウェーデンでは五月節日に妖巫黒兎をして近隣の牛乳を搾り取らしむると信じ、牛を牛小舎に閉じ籠め硫黄で燻べてこれを禦ぐ。たとい野へ出すも小児を附け遣わさず主人自ら牛を伴れ行き夕に伴れ帰つて仔細に検査し、もし創つきたる牛あらばこれを妖巫に傷つけられたりと做し、燧石二つで牛の上から火を打ち懸けてその害去ると信じ、また件の黒兎に鬼寄住し鳥銃も利かず銀もしくは鋼の弾丸を打ち懸けて始めて

これを打ち留め得と信ぜらると（ロイド、前出一五）。以前は熊野の獵師みな命の弾丸とて鉄丸に念仏を刻み付けて三つ持ち、大蛇等変化へんげの物を打つ必死の場合にのみ用いた。伊勢の巨勢こせという地に四里四方刀斧入らざる深山あり、その近傍で炭焼く男いつの歳か十月十五日に山を去つて里に帰らんとするに妻子を生む。因つて二里半歩み巨勢へ往き薬を求め還つて見れば小舎の近傍に板い箕たみほど大きな蹟あとありて小舎に入り、入口に血滴したたりて妻子なし。必然変化へんげの所為と悟り鉄砲を持ち鉄鍋てつなべの足を三つ欠き持ちて足蹟を追い山に入れば、極めて大なる白猴新産の子を食いおわり片手で妻の髪を掴み軽々と携えて走り行く、後より戻せと呼ぶと顧みて妻を樹の枝に懸けて立ち留まりやがて片手で妻を取り上げその

頭を咬む^か、その時遅くかの時速くその脇下に鍋の足を射込んで殺しおわったが、全体絶大なかなか運ぶべくもあらねばその尾のみ切り取つて帰つた。白毛茸^{じょうせい}生僧^{せい}の払子^{ほつす}のごとく美麗言語に絶えたるを巨勢の医家に蔵すと観た者に聞いた人からまた聞きだ。すべて化生^{けしやう}の物は脇を打つべく銃手必死の場合には鉄丸を射つべしというた。スウエーデンと日本と遠方ながら似たところが面白くて書き付けた。英国の一部には兎が村を通り走ればその村に凶事生ずとも火災ありともいう。明治四十一年四月ハロー市の大^{ノーツ・エン}火の前に兎一疋市内を通り抜けた由（翌年六月五日の『随筆問^{ド・キーリス}答雑誌』四五八頁）。

最後に和田垣博士の『兎糞録』はまだ拝見せぬが兎糞には種々

珍しい菌類を生じ予も大分集め図説を作りある。備後びんごの人いわく
 兎糞を砂糖湯で服すると遺尿に神効ありと。また予の乾児こぶんに兎糞
 を乾かして硬くなったのを数珠に造りトウフンと名づけて、田辺
 湾の名物で只今絶滅した彎珠の数珠に代えて順礼等をあざむ給き売った
 者がある、何してでも儲くりや褒められる世の中には見揚げた心
 底じゃ。

(大正四年一月、『太陽』二一ノ一)

(付) 兎と亀との話

『太陽』雑誌の新年号へ「兎に関する民俗と伝説」という長篇を
 書いたがここには『太陽』へ出さなんだ事ばかり書く。

第一に小学児童が熟知よくしった亀と兎の競争の話について述べよう、これは『イソップ物語』に出たものだ。イソップはギリシアの人で耶蘇ヤソ紀元前五六十年頃生きておった名高い教訓家だが、今世に伝われる『イソップ物語』は決してそんな古いものでなくずつと後の人がイソップに托かこつけて書き集めたものという、しかし何に致せ西洋話本の親方としてその名声を争うものはない、「亀と兎の競争の話」はこの物語に出た諸話の中もつとも名高い物で根気よなく辛抱して励めば非常の困難をも凌しのいで事業を成就し得る事を示したものだから気力ある若い人々が世間へ出る始めにこの話を額の立て物と戴いたき真ま向まっこうに保持して進撃すべしと西洋でいう。この話に種々の異態がある、しかし普通英国等で持て囃はやすのはこう

である。いわく兎が亀に会うて自分の足疾はやきに誇り亀の歩遅おそきを嘲ると亀こた対えてしからは汝と競争するとして里程は五里賭かけは五ポンドと定めよう、さてそこに聞いている狐を審判役としようと言ふと兎が承知した。因つて双方走り出したが兎はもとより捷疾だから亀が見えぬほど遠く駈け抜けた、ところで少し疲れたらしい、因つて路傍の羊齒しだ叢中に坐つてうとうとと眠る、己れの耳が長いから亀がゴトゴト通る音を聞くが最期たちまち跳ね起きてまた走り抜きやるつもりだった、しかるに余り侮り過ぎて眠り過ぎた間に亀は遅いものの一心不乱に歩み走つてうとうと目的点へ着いたので兎の眼が覚さめた時はすでに敗けいた。

欧州外にもこれに似た話があるがくだん件の話と異なり、辛抱の力で

遅い奴が疾い奴に勝つたのでなくて専ら智力の働きの勝つたとして
いる。サー・アレキサンダー・ブルドンがフィジー島人から聴
き取った話に曰く、鶴と蟹とがどちらが捷はやいと相論じた、蟹が言
うには何と鶴が言つても己おれが捷い、すなわち己が浜を伝うて向う
に達する間に鶴に今相論じいる場所から真直に飛んで向うへやつ
と達し得ると言つた、鶴しからば競争を試やつて見ようと言つと蟹
が応じたので二人一斉に一、二、三と言おわい畢つて鶴が一目散に飛
び出す、蟹は徐おもむろに穴に入つて己おれの眷属が到る処充滿しているから鶴
はそれを己一人と惟おもうて騙だまされる事と笑わらひいる、鶴が飛んでいる
中何処どこへ往つても蟹の穴があるのを見て、さては己より前に蟹が
そこへ来て早穴はやを掘つて住んでいやがるかと不審してそこへ下り

て耳を穴に当て聴いて見るとブツブツと蟹の沫あわ吹く音がする、また飛び上がって少し前へ往くとまた蟹の穴が見えるのでまた下りて聴くと沫の音する、早蟹がここまで来て穴を掘っておると思うて何度も何度も飛んでは聴き聴いてはまた飛び上がり、余り疲れてついに海に落ちて鶴は死んでしまった。また一つフィジー島で話すは鶴と蝶との競争で蝶が鶴に向い何とトンガ島まで飛んで見よ、かの島には汝の好物の蝦えびが多いというに、鶴これに応じて海上を飛び行くその背へちよつと鶴が気付かぬように蝶が留まつて鶴の飛ぶに任す、さて鶴が些休息すこししようとしだすと蝶はたちまちその背を離れ予の方が捷いと言いながら前へと飛んで行く、小こ癩しやくなりと鶴が飛び出して苦もなく蝶を追い過すと蝶また鶴の背

に留まり、鶴が休もうとするとまた蝶が嘲弄しながら飛び出す、このように蝶は鶴の背に留まり通して鶴は少しも休む事ならずついに^{つか}勞れ死んでしもうた。

マダガスカル島にもこんな話が若干ある、その一つにいわく、昔々野猪と蛙が平地から山の絶頂まで競争しようと思つた、さて野猪が^{えら}豪い勢いで乗り出すと同時に蛙がその頸上に飛び付いて留まつた、蛙の身は至つて軽く野猪の頸の皮がすこぶる厚いから一向気が付かぬ、かくて一生懸命に走つて今一足で嶺に達すると、^{せつな}刹那蛙が野猪の頸からポイと躍^とんで絶頂へ着いたので野猪我は蛙にして遣^やられたと往生を唱うた、残念でならぬから今度はどちらが能く跳ぶか競べ見んと言つて蛙^{たやす}容易く承諾し打ち伴れて川

辺に到り一、二、三といいたうおと同時に野猪が跳び出すその時遅くかの時速くまた蛙めが野猪の頸に飛び付いたのを一向知らず、努力して川の彼岸へ跳び下りる前に蛙がその頸から離れて地へ下りたので野猪眼を赤くし口から白い沫を吐いて降参した。

今一つマダガスカル島の話には野猪と守宮やもりと競争したという、ある日野猪が食を求めに出懸ける途上小川側で守宮に行き逢い、何と変な歩きぶりな奴だ、そんなに歩が遅くちやアとても腹一杯に物を捉え食う事はなるまい、お前ほど瘠やせて足遅と来ちや浮うかう々かすると何かに踏み殺されるであらう、よしか、一つ足を試して見よう、予がこの谷をまるで歩き過ぎした時に汝はまだこの小川の底を這はい渡ってしまわぬ位だろうと言うと守宮そんなに言わ

れると一言も出ぬ、しかし日本の売淫などの通語にも女は面つらより
 床上手などと言つて守宮にはまた守宮だけの腕前足前もあればこ
 そ野猪様の御厄介にならず活きて居られると言うものサ、何と及
 ばぬながら一つ 競かけくらべ 駈めを試して見ようでござらぬかと言うと、
 野猪心中取るにも足らぬ守宮奴めと蔑みながら、さようサ、だがこ
 こは泥が多い万一己の足で跳ね上げる泥塊が汝の身に降り懸つかっ
 て見ネーナ、たちまち饅頭の上へ沢庵の重しを置いたように潰つぶれ
 てしまふが気の毒だ、ちようどソレその上の方に乾いた広場が
 あるからそこで試して見ようそしてもし予が負けたら予と予の眷
 属残らず汝守宮殿の家来になりましようと言うと、どう致しまし
 て野猪様御一足でいらつしやっても恐ろしくてならぬものを御眷

属まで残らず家来にしようなどは夢存じ寄りません、だがほんの遊戯と思召おぼしめして一つ御指南を仰ぎたいと守宮が答えて上の方の広場へ伴れ行き、サアあその樹幹にヴェロと言う茅かやが生えて居る、そいつを目的に競争と約束成りて野猪がサア駈け出そうと言うと守宮オツト待ちなさい足場を確しかと検して置こうと言うて野猪の鬣たてがみの直ぐ側そばに生えおつた高い薄すすきに攀よじ登りサア駈けると言うと同時に野猪の鬣に躍び付いた、野猪一向御客様が己の頸に取り付いていると心付かず、むやみ無性に駈け行きてかの樹の幹に近づくとたちまち守宮は樹の幹に飛び付きそれ私の方が一足捷かつたと言われて野猪腹を立て一生懸命に駈け戻ると守宮素捷くその鬣に取り付きおり、今一足で出立点と言うときたちまち野猪の前

へ躍び下りる、かくすること数多回一度も野猪の勝とならな
ので憤りと憊^{つか}れで死んでしまったとある。

上述の諸話と大分変つたのがセイロンに行わるる獅と亀の競争
の話で、いわくある時小川の岸辺で亀と獅と逢う、亀獅^{むか}に
がこの川を跳び越えるよりも疾く予はこの川を遊^{およ}ぎ渡つて見すべ
しと言つた、獅奇怪な申し条かなと怪しんで日を定めて競争を約
した、その間に亀その親族のある一亀を語らい当日川の此方^{こなた}に居
らしめ自分は川の彼方^{かなた}に居り各々ラトマル花荵一つを口中に銜^くむ
事とした、さて約束の日になつて獅川辺に來り亀よ汝は用意調^{ととの}う
かと問うと、用意十分と答えたので、獅サア始めようと川を跳び
越えて見れば亀はすでに彼岸に居る、またこの岸へ跳び來つて見

ればやはり亀が早渡りはや着いている、同じ花荵を一つ含んでいるから二足の別々の亀を獅が同じ一足の亀と見たんだ、獅焼糞やけくそになり何と貴様は足の捷い亀だ、しかし予ほどに精力が続くまいいっそどっちが疲れ果て動くことのならぬまで何度も何度も試して見ようじゃないかと言うと、亀は一向動かずに二足別々に兩岸に坐りおれば好よいのだから異議なくサア試そうと答えたので、獅狂人のごとく彼岸へ飛んだり此岸しがんへ飛んだり何度飛んでも亀が先にいるのでついに飛び死じにに死んでしまいました。

シヤムの話には金翅鳥こんじちよう竜を堪たんのう能するほど多く食おうとすれどそんなに多く竜はない、因つて金翅鳥ある湖に到り、その中に亀多く居るを見てこれを食つい悉くそうとした爾そのとき時亀高声さけに喚ん

でわれらをただ食うとは卑劣じや、まず汝と競かけくらべ駢あして亀が劣つたら汝に食わりようというと、金翅鳥しからば試そうと言つて高く天に飛び上がった、亀はたちまちその眷属一切を囑集して百疋と千疋と万疋と十万疋と百万疋と千万疋とそれぞれ一列に並んで全地を覆うた、金翅鳥その翼力を竭つくし飛び進むとその下にある亀がわれの方が早くここにあると呼ばわる、いかに力を鼓して飛んでも亀が先に走り行くように見えて、とうとうヒマラヤ山まで飛んで疲れ果て、亀よわれ汝が足捷の術に精進せるを了さとると言つてラサル樹に留まつて休んだとある。

ドイツにこれに似た話があつて矮身の縫工が布一片を揮ふるうて蠅七疋を打ち殺し自分ほどの勇士世間にあらじと自賛あつぱれし天晴世に

出で立身せんと帯に「七人を一打にす」と銘して出立した、道で巨人に逢うて大力に誇ると巨人何だそんな矮身がと嘲り石一つ採つて手で搾ると水が出るまで縮める、縫工臆せず懐中より乳腐にゆうふを取り出し石と称し搾つて見せると汗が出た、巨人また石を拾うて天に向つて抛ほうると雲を凌いでまた還らぬ、縫工兼ねて餌食にと籃かごに入れ置いた生鳥を出し石と称して抛り上げると飛び上がつて降りて来ぬ、巨人さても矮身に似ぬ大力かなと驚き入り今一度力を試そうと大木を引き抜き二人で運んで見んと言うと、縫工すべて木の本もとの方より末の方が枝が多く張つて重いものだ、汝は前になつて軽い根本の方を担かつげ、われは後にあつて重い末の方を持つて遣ろうと給あざむいて、巨人に根を肩にさせ自分は枝の岐またに坐つてい

るのを巨人一向気付かず一人して大木を担げ行いたので憊れてしまつた、それから巨人の家に行つて宿ると縫工夜間寢床に臥せず室隅に臥す、巨人知らずあんちゆう闇中鉄棒もて縫工を打ち殺さんとして空しく寢床を砕く、さて早殺しはややつたと安心して翌朝見れば縫工つが恙なく生き居るので巨人怖れて逃げ去つた、国王これを聞いて召し出し毎々つねづねこの国を荒らし廻る二鬼を平らげしめるに縫工恐こわご々往つて見ると二鬼樹下に眠り居る、縫工その樹に昇り上から石を落すと鬼ども起きて互いに相棒の奴の悪いたずら戯と早合点し相罵り同士討ちして死におわる、縫工還つて臣一人で二鬼を誅したと奏し国王これを重賞した、次に一角獸現じ国を荒らすこと夥おびただしく国王また縫工してこれを平らげしむ、縫工怖こわごわ々に立ち合うと一

角まっしぐら 驀然に駈け来つて角を樹に突つ込んで脱けず、縫工幸いに樹の後に逃れいたが、一角さえ自在ならぬと至つて弱い獣故たちまち出でその角を折り一角獣を王の前へ牽ひき出した、次に類似のぎようこう 僥倖で野猪を平らげ恩賞に王女を妻に賜うたとある、前に述べた亀が諸獣を給あざむいた話に似たのはわが邦にも『古事記』に因幡いなばの素しろうさぎ 兎が鰐わにを欺き海を渡つた話がある、この話の類譚や起原は正月十五日か二月一日の『日本及日本人』で説くつもりである。

(大正四年一月一日および四日、『牟婁新報』)

青空文庫情報

底本：「十二支考（上）」〔全2冊〕「岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年1月17日第1刷発行

1997（平成9）年10月6日第10刷発行

底本の親本：「南方熊楠全集第一巻」〔十二支考※〕〔#ローマ数字1、1-13-21〕「乾元社

1951（昭和26）年5月25日発行

初出：兔に関する民俗と伝説「太陽 二一ノ一」博文館

1915（大正4）年1月

（付）兔と亀との話「牟婁新報」

1915（大正4）年1月1日、4日

※◇内の引用漢文の訓読は、編集部によります。

入力：小林繁雄

校正：曾我部真弓

1999年7月5日作成

2016年5月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十二支考

兎に関する民俗と伝説

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 南方熊楠

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>